



中村俊定文庫  
文庫 18  
417



小序

いかに一丁の歌あはれ白合と  
いふもさうかた判老をさうい  
ふもさうかた乃流きさういふ  
いふもさうかた乃流きさういふ  
いふもさうかた乃流きさういふ  
いふもさうかた乃流きさういふ  
いふもさうかた乃流きさういふ  
いふもさうかた乃流きさういふ  
いふもさうかた乃流きさういふ  
いふもさうかた乃流きさういふ



組あもせと阿あもよあもよ  
しあもあもあもあもあもあも  
あもあもあもあもあもあもあも  
梓の月也善く世も雪門の  
風姿を志しふんふれを續と  
清との也明和元年冬正月

書丹生白堂述

歳旦



夕暮と夕し能乃海の春 暮太  
山凡乃門下風をり松乃表 吐月

新歳

菊草や松より白き人住 月  
万さふや爰ハ橋ノ礎て也 太

人日

血水よりそを掃く志草か 太  
あらしから神乃あらしらあ草能 月

梅

紫垣乃禁之吹り梅乃これ  
板々吾れ若年志む時水の音

鶯

いふひまの啼きよあて隠きり  
空々耳を障あ家うらけり

柳

それあつて居ては柳と梅の子  
ゆりまけて小枝も子と柳の那

太月 太月 太月

風中

星あのと空うらみきりいの夢  
かみりるまきりふきり風中

春名

あつて汲て捨てやまれ吾  
流るれ都おろせえる歌うれ

鹿

唯此乃浦て水あふ鹿の子  
能因の星を鹿れひの心

太月 太月 太月

白真

あゝ魚や真一と秋に波に  
白真や思ふと夏日比に魚

太月

海苔

六の了海に胡夕安一海苔二枚  
富士海苔や思ふと秋に魚

太月

春雨

春向に亭又あらしむ  
糸好しの糸は雨を思ふ

太月

猫意

く〜め〜 猫意 や猫の意  
足迄乃〜の意を思ふ

太月

朧月

あはれ思ふ二思ふと朧月  
地をハまぶ地をの人にお月

太月

接穂

女房の思ひと接穂  
咲て〜軒張り接穂

太月

涅槃

福をんまや 月の光ハ万々あり  
獲るもろく 喰ぬ夏あり涅槃像

太月

蝶

秋まきの外を風をそく 加蝶は  
流し中二葉は白ふ如蝶の乳

太月

草花

草花をや 朝日夕日の家や川  
多坑る大や 草花乃むれなく

太月

椿

鶉れ又葱が 一葉系 椿をまぬ  
芸若中一輪や 記椿の系

太月

音の種

音てくく 音れらくく 水車  
多印と下舟の 音集る音の音

太月

雛子

綿ふまるとの 尻立る 雛子は  
口ふ寸乃 音をわ出て 雛子の音

太月

雲雀

卯を豊之と悦び申して雲雀系  
秋も是れ空之居ると雲雀

太月

角

小男麻乃角ハ幼して小童也  
人形々々此れあはれ女也

太月

蛙

子ノ指女田之約之蛙之那  
似城乃之此子かやふく蛙

太月

燕

そらから此して免と傳ふと  
多影乃あ影うまゝるあうな

太月

苗代

鳴子ハ風のこしし苗代田  
秋風乃一葉々々苗代田

太月

帰雁

かき多き日ハあり雁  
小向中入るるあひ月かき

太月

桃

折人とおまふくや桃のそ風  
濱毎やゆく月桃の碑の海

太月

雛

うさひの尻も胡へて雛  
淡月と秋うつり雛可風

太月

出代

おつりや或人月日鏡山  
お智やいさ馬を海に鳥を月

太月

萱

雨とふ花と成るる昔の風  
心と時とまゝはるるや萱

太月

海棠

海棠や英一とくまの淋  
海棠や折日と月とまゝはる

太月

梅

日暮るる寺此のあり山とら  
破ふてく海の雲もはるる

太月



蚕

梅多し紫からしりたる蚕は  
これ言乃里より後きり蚕分

太月

燕

立たれと日なるとも一夏の死  
山麓や花の道も九折

太月

躑躅

鳴く一舌れさうと鳴く  
花をく鷲さくこれと花

太月

春日

去れ日や門外花満の影法師  
春日の日や茶廊く此字拾遺

太月

花

山と白多風之目より花並  
白根乃掃も捨りり花乃穢

太月

更衣

梅公の月出掛と多し一更衣  
事そこれと香もさく掛はと花

太月

若菜

康乃子の言えりしや若菜の  
夕暮れ咲峨みぬるも若菜

太月

時鳥

ふとさす葉臥蹴庭へて出りけ  
回さすさす忘るる傘を足さり

太月

灌佛

聖なるる家定み川花沖堂  
羅海を牡丹やまはるる花沙堂

太月

青嵐

帳くあはれく分てはしき青嵐  
みえりし時にも回細腰や青嵐

太月

牡丹

あはれぬの日よ咲果ぬりて  
掃庭に牡丹のむね居り

太月

杜若

新海ふあゝ門河りかきつる  
花を地をさへりし若菜杜若

太月

葵

翠葉層層如りて奥向る花や蒼翠  
秋風送る花散りてあふひ竹

太月

筆

ふけのふ紙中りて井の底  
筆の井の底に月夜を乳

太月

田植

よし女乃極々やうしひと川松  
ひらわして月より漸く田植の足

太月

麦秋

旅麻して知るや麦も秋の暮  
麦の穂やひらりふれく穂乃暮

太月

旅教書

健色くよ書之落しきりか人を  
旅人と見知て近くかんて鳥

太月

短歌

うゝ、杖や揚屋の消ぬ花の幾つ  
短歌や夕陽を確をまへるを

太月

粽

御所下りみ草よりとりて粽は  
川尻に習けし庭に梅の肌

太月

五月酉

内々これや傘さして守不破は  
涼々さみ流るあり五月 酉

太月

螢

朽多流しきし身は透き螢の  
傘内にて取らば此多紙す所也

太月

蚊

蚊を〜て後取う〜室の目撃  
火桶より未指板あり蚊を〜

太月

蝙蝠

蝙蝠や舌と起りぬ肌を〜  
蝙蝠やむ〜乃余此捨扇

太月

柚花

淋〜これ奪を葉とちり花柚を  
あ〜美のみ〜夜〜受て花柚は

太月

鄒

銀乃香也。已希入。嗟峨也。與高也。  
誰之服，宿。一衣銀。

物烟

山河既湯。一。一。物。物。物。  
日。物。物。物。物。物。物。物。

蕙蕙

蕙蕙也。結。物。物。物。物。物。  
蕙蕙也。蕙蕙也。蕙蕙也。蕙蕙也。

蕙楓

蕙楓也。也。也。也。也。也。也。也。  
蕙。蕙。蕙。蕙。蕙。蕙。蕙。蕙。

今年竹

竹。竹。竹。竹。竹。竹。竹。竹。  
竹。竹。竹。竹。竹。竹。竹。竹。

河骨

河骨也。也。也。也。也。也。也。也。  
河。河。河。河。河。河。河。河。

太月

太月

太月

太月

太月

太月

苔花

河のりて受ても跡一帯の花  
賽の海又都乃多や苔花の家

太月

蓮

白蓮下人教さる花の心  
月一系るく流るり蓮の中

太月

田村紅

植てくおの星や田村紅  
山ひは宵中くをく田村取

太月

蟬

幸流や日乃入まそハ蟬一本  
井之身て高より産蟬の序

太月

蓮歌

迎るの海やあまねく何  
是歌やあまねくあまねく

太月

晒

乃別乃多端日如や山戸賣  
心く西の志ろく積るやし日向

太月

遊遊草

ふふふふふ 涙めを惜み思ふ  
遊遊草や 吐乃多紙意を引

太月

清水

ふふふふふ 水にしみたり 苔清水  
系中 紙速氏 深せそ 清水泉

太月

竹取人

綿繡の 少女裸や 井婦人  
曉々小町、骨や 井婦人

太月

涼

川風乃 人を 踏まや 夕暮る  
似城の 薙る せり 夕涼

太月

風

市中に 暮る 氷室や 吹く風  
ふふふ 紙まき 風や 風の 吹くを

太月

津後

ふふふ 暮る 急がし 岩を 津後川  
ふふふ 水を 流す 津後の 風

太月

之秋

たつれり芽此編と云ふ今胡秋  
銅鑿と淋しきをそふ秋

太月

胡秋

胡秋や山月し秋と記  
あきう海や日教と海き秋の奥

太月

七夕

星よ張りかりそ文り張る  
かきそや夜の一帯のりり香

太月

秋風

あき風やお竹し秋の帆  
秋風や江の浦の一帯りり

太月

編毒

編毒や星は漏てふ彼のみ  
山月や星は清の星は秋

太月

角力

長渡乃部と角力  
志知しり角力

太月



盆

此家平榭つゝえきを玉糸  
石の穴乃灯せえ長く魂まかり

太月

踊

恋ももれ居そめろ踊る  
秋風よ人まのなみくさるる

太月

芭蕉

七堂の外に大破れを御座  
そぬはれはさるちる風の色蕉は

花野

網干も又漏つくる花野  
わすれぬくは阿ふりさる花野は

太月

鶯

赤紅うも鶯の忘ぬや鳴る  
そのくさき鶯の仲と鶯の

太月

虫

ひーやや傘もろり面乃と  
畔のちるん 雲もろりあられ虫の

太月

棠

蟬よあふれけ人あはれと棠の香  
昔は浅や風の葉乃之り花

太月

露

露は露よしの水も叶はさるる棠  
あはれあめの果とをとり六玉川

太月

和鐘

和鐘や水と露をそけほし  
和鐘や結ゆと朱と集れは

太月

女郎花

おあはれ人よと秋のうらみ  
昔の牧乃舟と波より女郎花

太月

萩

萩あはれしと秋の葉の朝露  
因雨りそよふり萩乃花

太月

雁

あはれとえと秋の葉  
二羽くとあはれと雁

太月

待宵

待宵や 三つら〜と女節を  
待宵や 三つら〜と女節を

太月

名月

夏こそとくは海と空ありての月  
月影如多 月と空の入り夜

太月

十六夜

十六夜や 雲〜と隙〜 庵れ夢  
十六夜や 雲〜と隙〜 庵れ夢

太月

鷹

端〜と中〜て 我を風と鷹とれ  
端〜と中〜て 我を風と鷹とれ

太月

野分

金海〜と面吹〜つる 地分〜とれ  
金海〜と面吹〜つる 地分〜とれ

太月

兼山子

待宵や 兼山子と 兼山子と  
待宵や 兼山子と 兼山子と

太月

流水

月細くあやしく照りて流水を  
田乃水は四う唇う流水を

太月

礎

接し夜乃をくせえぬと礎を  
念し星の如く白くあやしく

太月

苔麦花

山畑にふゆぬをうけりて花  
まよも又結るるものと苔麦花

太月

葛

橋くく流るるものありきかつ  
一蔓乃漁村く魚や苔もみら

太月

萩

えくく結るて竹や萩の花の萩を  
漁火の團物集るる夜を

太月

菊

菊の日やちくぬ夕の月あり  
あゝ菊や花の山月をそよみ

太月

瓢

ふかくとまぶさのわが瓢  
一時のむとふくはくはく

太月

十三夜

折舟とるもえきあり後の月  
故屋泊めくさ地あり好れ月

太月

麻

ふくふくぬれぬいさき麻のき  
麻のきやふくさぬぬ味有山

太月

未枯

くく枯や居のく汲水車  
未枯やぬぬぬ丸未枯

太月

秋暮

船碇く海くくくく秋の暮  
眠くくく様く未枯やぬれく

太月

落水

舟人橋くくくくく落水  
けわくくくくくくくくく

太月

紅葉

花の戻来も自傳よれぬを  
はつとき中絶ふか恨むりも哉

太月

新秋

まじくと小田川秋乃端  
ゆく秋やちを植木屋のひと川松

太月

小春

山々のしりしり松乃  
渡りて松の柳のあそびかきうそ

太月

晴雨

いろはぬき屋も時を  
植木屋の松の志のくやわしれ

太月

口切

口切や若乃價もこの  
口切やあはれあはれ客あり

太月

水

英しき四河屋の川水  
似城の若くは流るる水

太月

道摩忌

幸一摩忌や市急も日ておちる白  
逢一急や市急も日ておちる白

太月

十領

証やえあし限くぬ十領礼  
鑑合れ此のぬよのふ十領礼

太月

乙亥

又其のぬももるぬ乙亥系  
おと流しき日おしし乙亥系

太月

乙亥

凍れくる岩るくやる乙亥のむ  
淋しきの目れりやる乙亥のむ

太月

北号考

おと流しき日おしし乙亥系  
おと流しき日おしし乙亥系

太月

枯柳

多山時水のちりて枯やき  
枯柳 民の服くけりて葉

太月

帰花

爰より妙なるはあはれし帰花  
啄木のうらみ〜其さうかづり美

火桶

惟より中らぬはあはれぬ火桶  
あはれぬる官女の中は火桶

病状

楊子一楊と病つてお病状  
病状〜家をもつてお病状

冬花

翁は月夜〜〜〜冬あり  
秋は〜〜〜冬花

千鳥

漂ふよもあはれぬ鳥はあはれ  
はくも〜〜乃ち〜〜

細代也

浅く月〜〜〜細代也  
我家ハ酒〜〜細代也

太月

太月

太月

大月

太月

太月



木枯

あう〜や湖田の月物  
用や去る食今心きり 雲

太月

枯地

ひの家の月了り落葉枯地  
牛の尾の糸ハ紐うぬ枯地う糸

太月

干菜

都るも端乃嘉の干菜  
我とけ〜干菜〜た〜ぬ〜糸

太月

紙

紙汁や買つ〜と〜紙汁  
紙汁や喰つ〜と〜紙汁

太月

紙衣

西川〜紙衣の〜紙衣  
紙衣〜紙衣〜紙衣

太月

海嵐

砥の中紙ま〜紙衣海嵐  
紙衣〜紙衣〜紙衣

太月

脩鶴

冬心又一花ふりあがり三葉の  
買うもくはきよの河う脩鶴

太月

路中

雲ひより神々出て路中乳  
妹うり子風流流る路中亦

太月

顔又世

う河あやや流るもあはれも葉の吹  
顔うりやあはれ流るる顔の吹

太月

髪並

髪をまきやあはれ流るる川舟井は  
うりあや一をれ流るる扇の吹

太月

河鼓

流るる心飄うはし一踏きあ  
夜乃鼓の又百もりやそそ鼓

太月

巨魁

割傷の世々う流るあはれ  
死る心と虚流いて折る巨魁

太月

氷

障子張る海に水やうす水  
引込のちきりて所は氷の子

太月

雪

動くせしきききき河の雪の井  
善く引ききき松やひの松

太月

氷柱

一糸志く入日乃氷柱うね  
お好く夜乃きくうう氷柱

太月

暖鳥

風多ぬあつ海の鳥色暖鳥  
紋多く八幡行ふぬあ鳥

太月

寒

寒口角うす底交まうるきり  
あう子身とくうううう

太月

茶喰

温他うりひの茶喰り茶喰  
友猿と茶喰り茶喰り茶喰

太月

佛名

仏名や地獄の衆乃 劫らるる  
佛より中をのこして後し 古佛

太月

空の勢

空の勢や指より次て 蘇自立  
実の勢や指年空の 何より先

太月

歳書

記すれども人よりは 西東燕 師を成  
毛髪をとり毎後の 勢小師を成

太月

水口 水口

おべ

うひよるる ぬ

ぬけり ぬのさる

空の中巻

空の中巻

